

特集

電子ブック： 試読型選書システム (DDA) を導入して

特集にあたって

まつもと かすこ
編集長 **松本 和子**
(メディアセンター本部課長)

電子ブックの利用形態は様々で、電子辞書のように単体で使うもの、いわゆるガラ携でも読める小説やコミック、Kindle、Koboといった再生用の端末（電子ブックリーダー）を使うもの、ブラウザあるいは専用のアプリを使ってPCやモバイル端末で読むもの等々がある。個人で読む場合には購入したものを全文ダウンロードすることも、クラウド上に置いて好きな端末で利用することも可能である。

図書館を利用する側からは、図書館で提供する電子ブックも同じように利用できると期待されているだろう。しかしながら、図書館向けの電子ブックのビジネスモデルでは、「1回の注文は10万円以上」、「分野毎のセット販売のみ、1冊単位では販売しない」、「印刷体を購入すれば電子ブックも購入可」、「電子ブックは冊子体価格の○倍」、「ダウンロードは○ページまで」、「新刊書は発行後1年間図書館には販売しない」といった条件がつくことが多い。またOPACから検索・アクセスできるよう目録データの入手は図書館としては必須と考えるが、提供しない

版元もある。利用形態もPCでの利用が一般的である。このように図書館で電子ブックを購入するにはクリアしなくてはならない課題が多かった。

そこで注目したのが複数の出版社のタイトルを収録し、タブレットやスマートフォンでも利用が可能で、目録データも提供される電子ブックのパッケージ（一括契約）商品である。パッケージにもそれぞれ特徴があるが、本学では2016年より試読後図書館に購入リクエストを出せる仕組みを持つパッケージを選択した。

本特集ではDDA（Demand-Driven Acquisition）を本学が選択した仕組みから「試読型選書システム」としたが、文字通りの訳は「需要駆動型購入方式」であり、利用者からの要望をきっかけとして電子ブックを購入・コレクションを構築する仕組みのことである。試読ではなく電子ブックへのアクセス回数や貸出回数により自動的に購入する仕組みもある。

本特集では本学でのDDA導入の背景や、その後の業務変化、利用者の反応や課題について電子資源担当、選書担当、レファレンス担当の視点で報告する。

